

## CORRENTE

Centro Culturale Italo-Giapponese

わたしとロダーリ⑨

## \*アリーチェ・コロリーナのひとり歩き\*

竹田 理乃

イタリア留学の苦楽をともした友人の息子さんが、この春から小学校に通い始めたと聞いて、腰が抜けそうになりました。ちょっと前まで幼稚園のスモックがあんなに似合っていたのに、もうランドセルを背負っているなんて。私と友人が「子ども用ハーネスってどうなん?」「命綱やね」などとお喋りしていた頃のことなど、今やひとりで登下校するようになった一人前の小学生にとっては、記憶にも残っていない遠い昔なのでしょう。

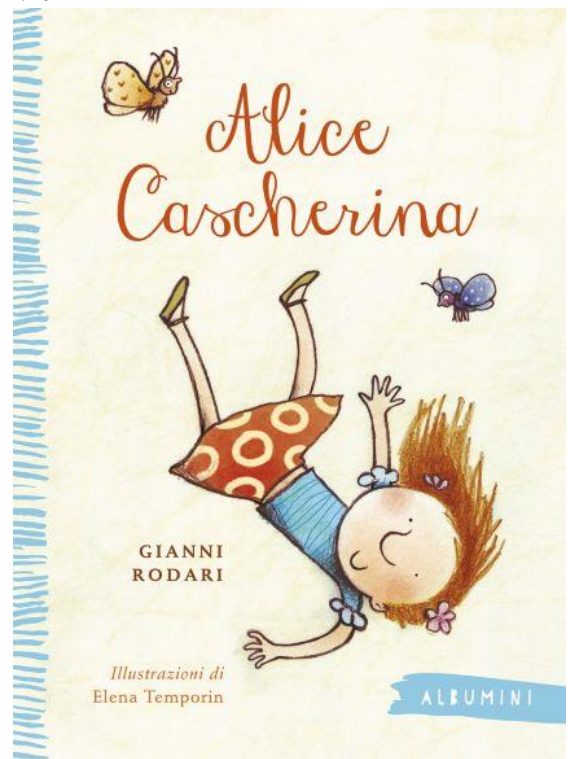
命綱が欲しくなるといえば、お宅に招いてもらったときのこと。にこやかに談笑していた友人が、いきなり真顔になって「待って、あの子、どこ行った?」と身構えてから、ちょっとした物陰に入っていた息子さんの姿を発見するまで、わずかに数分のことながら、血の気がさっと引いて、心臓がばくばく鳴っていた感覚には忘れがたいものがあります。小さな子どもがひとりで移動することの恐怖を学びました。

この連載コラムでご紹介しているイタリアの児童文学者ジャンニ・ロダーリの作品にも、日常からふらっと踏み出して、おとなの前から姿を消してしまう女の子が登場します。

その子の名前は Alice Cascherina ちゃん。ルイス・キャロルの『ふしぎの国のアリス』の主人公と同じ Alice という名前ですが、イタリア風に発音するとアリーチェになります。

名字の Cascherina も興味深いネーミングでして、これはイタリア語の動詞<cascare (落ちる・

倒れる)>と音がとても似ています。イギリスのアリスは時計を持った白ウサギを追って穴に落ちるところから冒険を始めました。それを知っているイタリア語版の読者は、アリーチェ・カスケリーナという名前を見ただけで、この女の子がふしぎのなかへ転がり落ちて行く展開を期待できてしまいます。



【『Alice Cascherina』表紙】

出典元: <https://www.edizioniel.com/prodotto/alice-cascherina-9788867143344/>

さらに、内田洋子さんによる日本語翻訳版に目を移してみると、アリーチェの名字の音が変わって「コロリーナ」となっています。原語版にあった音と意味の繋がりを保つために、日本語の動詞〈転ぶ〉やオノマトペの〈ころりん〉などを持ってきて、日本人にとっての「カスケリーナ」である「コロリーナ」を、翻訳作業の過程で作ってくださったわけですね。説明するのも野暮なほどビビッときますし、なによりかわいらしくて、私は大好きです。

さて、名前によってお話のなかへころりと転がり落ちてしまうことを運命づけられているアリーチェは、いったいどんなところへ姿をくらましてしまうのでしょうか。

短編集『パパの電話を待ちながら』には、アリーチェの登場するお話が2つ入っています。その最初のお話である「アリーチェ・コロリーナ」において言及されている落下地点は、目覚まし時計のなか、水の入ったボトルのなか、テーブルクロスなどがしまっている引き出しのなか、洗面所の穴のなかと、お父さんの上着のポケットのなか。すでにファンタジー小説の登場人物として自慢になりそうな落ちっぷりです。

落ちた場所だけでも笑えてきちゃうのですが、そこへ詳細が加わってくるともっとかわいくなります。たとえば、目覚まし時計に落ちこちてしまったのは、なかがどうなっているのか見たかったから。後ろの部分を開けてみたところ、歯車やゼンマイのあいだに落ちてしまいました。お祖父ちゃんが見つめてくれるまで、チックタックと動いているところへ巻き込まれてしまわないよう、あっちへこっちへと飛び跳ねていたというエピソードを読むと、なんだかノスタルジーを感じます。

ある意味で身に覚えがあるからでしょうか。公園の蛇口をちょっと大胆に捻ってみたら、思いのほか大量の水が迸って、おっかなびっくり水を止めようとしていたところを、近所の人が助けくれたのを思い出しました。いたずらのドキドキよりも、おとなの人が当たり前のように手を貸してくれたときの安心感の方が、より強く印象に残っています。

今のところ日本語で手軽に読めるアリーチェのお話は『パパの電話を待ちながら』に入っている2作品だけなのに対し、イタリア語でなら“*Le*

*favollette di Alice* (アリーチェの小さなお話)”というタイトルでまとめられている8作品を一気読みできます。

その本が手元にあったので、未邦訳のものも含めて再読していて気づいたのですが、どうやらアリーチェのお話の結末には、誰かに見つけてもらって終わるパターンと、誰にも知られずこっそり帰ってきて終わるパターンの2種類があるようです。

見つけてもらうということについて思いを巡らせてみると、ロダーリの『ファンタジーの文法』というエッセイ集には、かくれんぼに関して以下のような記述がありました。

置き去りにされたり、ひとりぼっちにされたりすることの恐怖を、ためしに味わうことである。あるいは、迷子になる恐怖である。(中略) 見つかることは、みんなの世界にもどり、自分の権利を取りもどし、再生するのに似ている。はじめぼくはいなかったのに、今はいるのだ。さっきは消えてしまっていたのに、また出てきたのだ。

こうした挑戦を通じて、子どもの自信と、成長力と、生きていることや知る事のよろこびはさらに強くなる。

(『ファンタジーの文法』ジャンニ・ロダーリ)

前者の結末がもたらす感動については、この抜粋で説明がつきそうです。

未邦訳作品「ボールのなかのアリーチェ」のラストシーンで、親切なパンの配達員(ローマではこの仕事をカスケリーノと呼ぶそうです)に見つかったアリーチェは、脱出のために壊してしまったボールを弁償しようと、家まで走ります。今までは隙あらば転がり落ちていた彼女も、連作の最後を飾るこのくだりでは、貯金箱に落ちこちなかったことが明言されています。かくれんぼは終わり、みんなの世界へ戻ったアリーチェは、遊び仲間のひとりとしてボールを壊してしまった責任を果たそうとしています。

では次に後者の結末の作品を挙げてみると、日本語でも読める「アリーチェ、海に落ちる」の結びは「アリーチェは、この日起きたことを誰にも話

しませんでした)となっています。

このお話のなかで、アリーチェは遊びに行った海のとりこになり、節度ある海水浴をうながすお母さんにひっそりと反抗して(私は魚になるのよ)と心に決めます。そしてイルカになれる少年に教わって、こっそり海へ飛び込むのですが……おもしろいところはお自身でお読みいただくべきですね。ちなみにロダーリの作品には、変身譚がたくさんあります。このお話の設定にぐっときた方には、短編集『猫とともに去りぬ』を強くおすすめします。

それはともかく、アリーチェの冒険が後者の結末を迎えるとき、おとなはなにも知らないままです。どんな経験を得たのかも、どんな成長をしたのかも、すべてはアリーチェだけの秘密となります。子ども時代のちょっとした秘密の甘さは、ひとり歩きの呼び水です。道草を食って帰ったあと、家族に「どっか行ってたの？」と声をかけられて、なんとなく「べつに」と答えてみたり、新しくできた友だちのことを黙っておいてみたりしながら、少しずつ自己を確立させていった時期の思い出を、アリーチェの沈黙に重ね合わせれば、共感を覚えずにはいられません。



【ナヴォーナ広場(アリーチェはローマっ子なので)】

冒頭で噂話をさせていただいた友人の息子さんも、今はきちんと通学路を往復できたことを誇ってくれますが、やがては脇道に入ってみたり、家とは反対側の道をたどって、こっそり探検に出かけてみたりするようになります。息子さんがひとりでの登下校に初めて成功した日、友人が「嬉しいんだけど、なんだかちょっと寂しい」と零したようなことばを、彼女の友人である私は、これから先もくり返し耳にすることになるはず。そうやって少しずつ遠くまで歩いていけるようになった彼が、いつかイタリアに足を踏み入れてくれるようなことがあれば、その時は友人と懐かしのランブルスコで乾杯して Viva Italia と叫び、若人の旅路のつづがないことを祈るのもそこそこに、声が枯れるまで留学時代の思い出話をしようと思います。

まだまだ厳しい子育ての道は続きますが、きっとアリーチェは友人のいい相談相手になってくれることでしょう。姿が見えなければ名前を呼んで探してくれる人がいること。秘密を暴かれないこと。必要ならば手助けが得られること。自分なりに責任を負えること。冒険に出られること、そして帰る場所があること。おおらかな安心感をアリーチェにもたらしめているこうした確信は、子ども達の幸福を祈って文筆活動を行っていたロダーリが、未知のなかへ転がり落ちる自由とともに彼女へ与えたものです。いつか勇気をもって自由へと踏み出すとき、子ども達が足掛かりにする安心感をどう養っていくのか。そんな問いに対するロダーリの答えの一端を、アリーチェ・コロリーナが握っているように思われます。

#### [参考文献]

『ファンタジーの文法』(ジャンニ・ロダーリ、窪田富男訳、筑摩書房、1990)

『パパの電話を待ちながら』(ジャンニ・ロダーリ著、内田洋子訳、講談社、2009)

Gianni Rodari, *La voce della fantasia*, Einaudi Ragazzi, 2014

(当館語学講師)

## 人喰い鬼とよばれたレーサー

谷口 和久

自転車レース史上最強の呼び名をほしいままにするベルギー人レーサー、エディ・メルクス。

イタリアのジャーナリスト、ジャン・パオロ・オルメツァーノは、「自転車レース史において、メルクスはもっとも強く、コッピはもっとも偉大である」と評した。記録のメルクスに、記憶のコッピというところか。

メルクスの通算勝利は 500 勝にものぼる。出場レースが 1500 ほどなので、3 回に 1 回は勝った計算になる。多い時には年間 50 勝を超えたが、週に 1 回は勝っていたわけだ。巨人・大鵬・卵焼きを足して 3 をかけたような男だ。

その情け容赦ない戦いぶりから、「人喰い鬼 Cannibale」と呼ばれた。とにかく他の誰も勝たせないんだ、という話を彼のチームメイトが家でしたところ、娘さんが「まるで人喰い鬼ね」と評したところから、このニックネームが広まったという。

逸話では、子供と自転車で競争ゴッコをするようなときでも本気で走り、決して子供を前に行かせることはなかったという。

そういえば、将棋の羽生善治も、子供や奥さんと指したときに（当然、駒落ちはするものの）忸度することなく勝ってしまい、子供さんを泣かせてしまったという話をどこかで読んだ記憶があるが、どちらも勝利への執念というよりは、己が捧げるものに取り組むときには手抜きなんぞできないというのが実際のところではないだろうか。

メルクスは、生まれはベルギーだが、イタリアとの縁が深い。キャリアの大半をイタリアチームで過ごし、使用した自転車もほぼイタリア車ばかりである。こんにち世界的ブランドとして名声をほこるコルナゴ、デローザ、カンパニョーロなども、メルクスの名前抜きにその歴史を語ることはできない。



【エディ・メルクスとトゥーリオ・カンパニョーロ】

出典元：<https://colombia.as.com/colombia/2017/03/17/>

[masdeporte/1489751718\\_732314.html](https://masdeporte.com/1489751718_732314.html)

幼いころから自転車に夢中で、そのころ近所の人たちからつけられたあだ名は「ツール・ド・フランス」。

アマチュア時代の 1964 年には東京オリンピックに出場、結果は 12 位であった。このとき優勝したのはイタリア人のマリオ・ザニンという選手であったが、プロ入り後はパツとしなかったようだ。ちなみに、当時オリンピックの自転車競技に出場できるのは、アマチュアのみであった（現在はプロも出場可）。

翌年ベルギーのチームでプロデビューをはたし、のちにフランスのプジョーに所属した。

プジョーはご存じのとおり、フランスの自動車メーカーだが、古くから自転車も製造しており、当然ながら所属選手は自社製の自転車に乗らなければならない。しかしながらプジョーの自転車が気に入らなかったメルクスは、ミラノにあるマージという工房で自分用の自転車を作ってもらい、表面のペイントだけプジョーに変えて乗っていたという。マージは、かつてファウスト・コッピも乗っていたブランドで、現在もミラノの自転車競技場に工房を構えている。

1968年にはイタリア人監督ヴィンチェンツォ・ジャコットの肝煎りにより、イタリアのファエマに所属することとなった。すでにブジョー時代にもミラノ・サンレモや世界選手権など、名だたるレースに勝利していたが、いずれもワンデー・レースであった。ファエマに移ってからは、ジロ・ディ・イタリアやツール・ド・フランスの総合優勝など、まさに人喰い鬼の名にふさわしい勝ちっぷりとなった。

チームスポンサーのファエマは、エスプレッソマシンのメーカーである。正式名称は Fabbrica Apparecchiature Elettro-Meccaniche e Affini、直訳すると「電気・機械・関連機器製造会社」と、なんともそっけない名前だが、この頭文字をとって FAEMA である。フィアット (Fabbrica Italiana Automobili Torino = トリノ自動車製造会社) などと同じパターンだ。

ファエマに移って2年目の1969年、前年に続きジロ連覇を狙うメルクスを激震がおそった。さしてきつくもなく、さほど狙う価値もないステージでドーピング検査で陽性となったのである。陽性判定が出た翌朝、イタリアのテレビ局が宿舎のホテルに押しかけ、まだベッドで横になっているメルクスにインタビューをする様子が放映されたが、泣きじゃくるメルクスは「自分の足以外のものに頼ることは決してない」と釈明した。

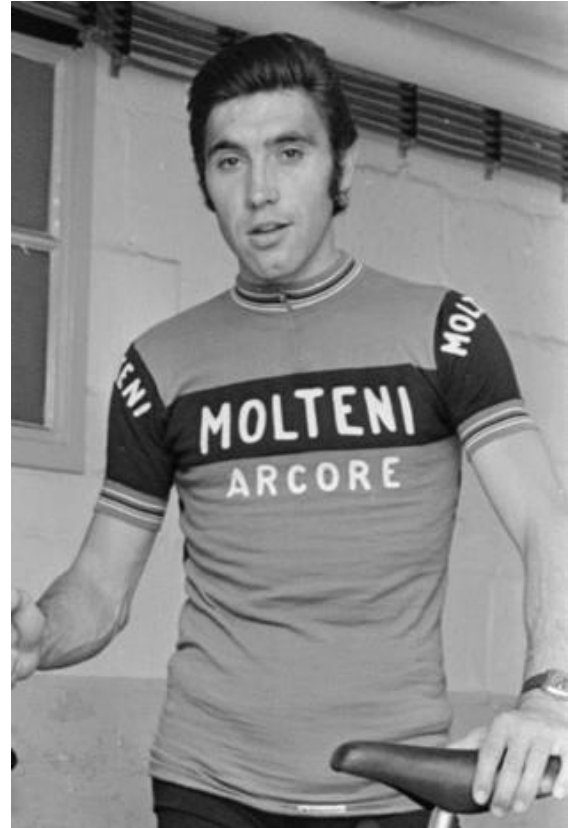
メルクスが失格になったことにより、繰り上げで首位となったのがイタリア人のフェリーチェ・ジモンディだったため、イタリア以外の国(とくにベルギー)では陰謀説がささやかれた。

のちにメルクスが語るところでは、さるチーム関係者がジロに負ければ金をやると、八百長を持ちかけてきたが、メルクスが断ったため、陥れるようなことをしたのだらうという話だ。ただ、その関係者はジモンディのチームではなかったと、メルクスはことわっている。

1970年にはイタリアのモルテーニに移籍した。スポンサーのモルテーニ社は、ロンバルディア州のアルコレ Arcore という小さな町にあるサラミなどの肉加工品製造会社である。現在は「サルミラノ (SALMILANO)」と名称が変わり、場所も変えて事業を続けている。

会社のホームページをみるかぎり、どこにでもありそうな地方の中小企業といった風情で、とても

自転車レースの一時代を築いたスポンサー企業には見えないが、オーナーの勝利への執念はメルクスに輪をかけて激しいものであった。オーナーからのプレッシャーも加わったことで、モルテーニ時代のメルクスは、サラミを製造するように、勝ち星を量産していくのである。



【モルテーニのジャージをまとったメルクス】

出典元: [https://it.wikipedia.org/wiki/Eddy\\_Merckx](https://it.wikipedia.org/wiki/Eddy_Merckx)

メルクスは絵になる男だったためか、彼を題材にしたドキュメンタリー映画も数多く制作された。とくに1974年のジロを舞台にした「The Greatest Show on Earth」は映像も音楽も美しく、ひとつの作品のようだ。単にレースの進行を映すだけでなく、レースの舞台裏や沿道の美しい風景も随所に流れて、たいへん見ごたえがある。今はYouTubeで全編見ることができるので、本当にありがたい。

このときのレースで、メルクスはピンチに陥った。ドロミテ山塊のトレ・チーメ・ディ・ラヴァレードという山の登りコースで、イタリアの若手ジャンバッティスタ・バロンケツリに総合タイムで一時的に逆転され、首位を脅かされたのだ。なんとかゴールでは

持ち返したものの、ギリギリのタイム差であった。最終的にミラノまでの 4 千キロあまりを走って、首位メルクスと 2 位バロンケツリの差はわずか 12 秒という大接戦であった。



【トレ・チーメ・ディ・ラヴァレード(ゴールは岩峰の麓)】

出典元: [https://en.wikipedia.org/wiki/Tre\\_Cime\\_di\\_Lavaredo](https://en.wikipedia.org/wiki/Tre_Cime_di_Lavaredo)

メルクスは機材へのこだわりも強く、現役時代はマージから始まって、コルナゴ、デローザと、イタリア車を乗り継いでいった。ことにデローザを使用していたころは、1 シーズンに 50 台もの自転車を作らせていたという。ポジションにも細かく、出走ギリギリまで調整したり、場合によってはレース中に工具を取り出して、自分で調整したりすることもあった。

また、メルクスといえば、パーツの肉抜き加工を広めたことでも知られる。これはなにかというと、ブレーキレバーやギアなどの部品にドリルで穴を開けてしまうのである。なんのためにこのようなことをするのかというと、穴が開く分、機材が軽くなり、ラクに走れるようになるのだ。1 グラムでも軽くて、速く走りたいというメルクスの執念が伝わってくる。ただ、強度が落ち、ヘタリやすくなるというデメリットがあるが、自転車を年に 50 台も準備させていたメルクスには心配無用のことだ。イタリアの工房では穴の開け方にも工夫をこらして、美を競い合った。

引退後も自転車ブランドを立ち上げたり、レースを主催したりと、自転車界への貢献は多岐にわたる。まさにもっとも強く、もっとも偉大なレーサーだ。

#### [参考文献]

Giuseppe Nardini, *La bici d'epoca*, L'Eroica, 2009

Beppe Conti, *Ciclismo Storie Segrete*, Gruppo Editoriale Armenia S.p.A., 2003

John Foot, *PEDALARE! PEDALARE!*, Bloomsbury, 2011

『イタリアの自転車工房』(砂田弓弦著,アテネ書房,1994)

『イタリアの自転車工房物語』(砂田弓弦著,八重洲出版,2006)

『挑戦するフォトグラファー』(砂田弓弦著,未知谷, 2018)

『ジロ・ディ・イタリア 峠と歴史』(安家達也著, 未知谷,2009)

『ロードバイク進化論』(仲沢隆著,樫出版社,2010)

The Greatest Show on Earth

<https://www.youtube.com/watch?v=9cQSqoGopLg>



【肉抜き加工されたブレーキレバー(筆者私物)】

Photo: Yasuda Masateru

(当館スタッフ)

---

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4

TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357

E-mail: [centro@italiakaikan.jp](mailto:centro@italiakaikan.jp)

URL: <http://italiakaikan.jp/>